

中国語中級テキストにおける練習問題についての調査と考察

—— 語彙学習に関する問題作成の試み ——

浅 野 雅 樹

目 次

1. はじめに
2. テキストにおける練習問題の意義と作成目的について
3. 中国語中級テキスト（25部）に対する調査
 - 3.1 テキストにおける練習問題の導入状況とその位置づけについて
 - 3.2 練習問題の形式数と分量について
 - 3.3 練習問題の形式について
 - 3.4 語彙学習に関する練習問題について
4. テキストにおける練習問題に関する問題点
 - 4.1 テキストにおける練習問題の配置について
 - 4.2 練習問題の分量と難易度について
 - 4.3 授業中に行う問題と自主学習で行う問題の分化
 - 4.4 練習問題の性質に応じたテキスト内への導入について
5. 語彙学習に関する練習問題の必要性
6. 語彙学習を中心とした問題
 - 6.1 類義語に関する練習問題
 - 6.2 反義語に関する練習問題
 - 6.3 コロケーションに関する練習問題
 - 6.4 語構成に関する問題
 - 6.5 多義語や多音語に関する問題
 - 6.6 課文に応じた語彙学習に関する練習問題について
7. おわりに

1. はじめに

主に日本の大学で使用されている中級レベルの中国語テキストは、「課文」「語注」「ポイント（要点）」「練習問題」の四つの要素から構成されるのが一般的である¹⁾。その中の「練習問題」について、大多数のテキストでは各課の最後の部分に示されることが多く、その課の学習ポイントの復習を目的とした問題がいくつかの形式で提示される。この練習問題の部分が実際どのように使用されるのかという点については、授業を担当する教員の判断により様々であると考えられる。授業中に、「まとめ」として学生に行わせるやり方や、宿題として学生に次回の授業までにやってくるよう指示する場合もある。また「練習問題」において示される問題を、小テストで出題したり、或いは期末テストなどの定期テストで、そのまま出題したりするといった方法などが考えられる。いずれにせよ、テキストにおける「練習問題」は各課の構成要素として非常に重要な役割を果たすということは言うまでもない。筆者は語彙学習を中心とした新しいタイプの中国語中級テキストの作成に向けての研究を進めているが²⁾、本稿では、まず既存の中級レベルのテキストにおける練習問題に対して調査を行ない、いくつかの問題点を指摘する。その上で、語彙学習のための練習問題のテキストへの導入に関する可能性について、例を示しながら考察をする。

2. テキストにおける練習問題の意義と作成目的について

中国語のテキストにおいて練習問題を作成し、提示する意義とその目的については刘頌浩 2009、周健 2004 等で述べられている。ここでは、日本で出版される日本人学習者用の中国語テキストにおける練習問題について、日本の大学の中国語の授業形態や学習者の状況を含めながら考えてみたい。

現在日本で出版され、主に大学の授業で使用されている中国語のテキストには練習問題が付されるのが一般的である。この練習問題がいつ、どのように使用されるのかという点については、テキスト内で明示されることは少なく、ほとんどの場合授業を担当する教師の裁量に拠るといことが指摘できる。したがって、練習問題には、授業の内容や進度、受講者数、学習者の状況等に照らし合わせ、教師が前章で述べたようなあらゆる方法で、適宜活用できるという意義があると言える。この点は、同じテキストの構成要素である「課文」、「語注」、「ポイント」には一般的に見出せないものであると考えられる。

とりわけ大人数の学生が受講する授業においては、各課の最後で練習問題を行なう前までは、学生は教師の話の聴いたり、また他の学生が発音したり、回答したりするのを聞くといった受身の姿勢での時間が長くなるという問題が実在する。実際、授業では「語注→課文→ポイント→練習問題」というようにテキストの構成に応じて進められるのが一般的であるが、つまりこの中の「語注→課文→ポイント」を行なう時間帯は、この問題点が顕著に認められる。しかし「練習問題」に関しては、授業時において、学生一人一人に主体的に行なわせることが可能である。したがって、学生にとって見れば、この練習問題を行う時間帯になってはじめて、自分が授業に参加している、或いは自分が主体的に学習に取り組んでいるという感覚が得られる。この点はテキストにおける練習問題の重要な一つの機能として見なすことができる。授業進行という学習の外在的な側面から総じて言えば、指定テキストに応じて授業を進める過程で教師主導になりがちな授業形態において、テキストに示される練習問題には、学習者が自主的に取り組む姿勢を喚起する役割があると言える。

次に学習者の外国語学習という内在的な側面から述べる。テキストに練習問題が導入され、提示されることに対しては、以下のような、いくつかの目的と意義が定められる。

- ① 「復習」—学習内容の定着
- ② 「まとめ」—「学習ポイント」の整理と確認
- ③ 理解度の測定
- ④ 学習者の総合的な言語能力の向上
- ⑤ 学習上の動機づけとメタ認知の促進

まず①について、授業用のテキストにおける練習問題という角度から考えると、授業で学習した内容を各学習者に定着させるという復習の目的がある。練習問題は各課の最後に位置づけられるのが一般的であることから見ても、「一度学習した内容や事項を復習させ、学習者に定着させる」という機能があるという認識を持つ教師は多いと言える。②について、テキストにおける各課の「課文」、「語注」、「ポイント」等の箇所でも学習した多くの内容や事項のうち、特に重要な点を選出し、それに関する練習問題を行わせることにより、学習者の頭の中で学習事項が帰納されることが期待できる。つまり、練習問題には、その課で学習したポイントに対しての「まとめ」の機能があると思える。また練習問題の中に、あえて学習者にとって難易度が高い内容に関する問題や、或いはあえて誤りやすい問題を作成することがある。これは学習者に対して、その関連するポイントを印象付け、理解度をより高めるといった目的によるものであると言える。③について、学習者自身が学習した内容を理解しているかどうか、練習問題を行うことにより、その理解度を測定することができる。例えば、その課で学習した「アスペクト助詞」と「接続詞の呼応表現」についての問題は正答を得られたが、「把」構文に関する練習問題は正答を得られなかったとする。そうすると学習者は「アスペクト助詞」や「接続詞」に関しては理解できて

いるが、「把」構文については理解に至っていない、といった自己認識ができる。④について、練習問題を解くということ自体が、学習者の総合的な言語能力を向上させることにつながることは言うまでもない。外国語学習の目的を知識の獲得だけではなく、何らかの形のコミュニケーションにおいて使用することに定めるのであれば、テキストにおいては量・質ともにより充実した練習問題を作成する必要がある。音声、語彙、文法、文章作成等のいかなる面においても、特に「話す」「書く」といったアウトプットの面での能力を向上させるためには、学習者自らが実際に言語を表出することにつながる空欄補充や質問回答、並べ替えや作文（日文中訳）等の練習問題が不可欠である。また発音、リスニング、読解、作文、会話、文化理解等の主に言語技能の面において、ある面の一つに特化して能力を測定したり、向上させたりするという目的がある場合は、その技能に応じた練習問題を作成し、学習者に行わせることに有用性があると言える。⑤について、学習者が主体的に練習問題を行ない、解答を確認することにより、学習意欲が増大し、また学習者が自ら学習ストラテジーや学習目的の明確化について考えることにつながる。つまり、学習者の学習上のメタ認知を促進させる効果が練習問題にあると見なせる。

3. 中国語中級テキスト（25部）に対する調査

主に大学で使用される中国語中級テキスト25部に対して、各テキストの練習問題に関して調査を行なった。ここでは、その調査結果を示す。

3.1 テキストにおける練習問題の導入状況とその位置づけについて

（表1）練習問題の有無

練習問題あり	24部
練習問題なし	1部

（表2）練習問題の位置について

各課の最後	21部
各課の中間	2部
各課の中間と最後	1部

（表3）単元練習や巻末付属の練習問題

あり	4部
なし	21部

（表1）で示すように、テキストに練習問題を設けるテキストが大多数を占める。また（表2）の通り、練習問題が示される位置については、各課の最後に置かれるものが多数を占めるが、各課の中間、つまり「課文」や「ポイント」の直後に置くものも一部見られた。また（表3）で示す通り、各課の最後に設けられる練習問題以外に4、5課ごとに、「まとめ」として設けられる単元練習や、テキストの巻末に付属として、一定量の練習問題を設けてあるテキストは4部あった。全体的に見るとテキスト間における相違は少なく、練習問題の配置については画一的であると見なせる。

3.2 練習問題の形式数と分量について

（表4）練習問題の形式数について³⁾

問題形式数	テキスト数	問題形式数	テキスト数
1	1	4	5
2	2	5以上	4
3	12		

練習問題の形式は様々であるが、ほとんどのテキストでは、各課において用いる練習問題の形式を統一化して導入し、提示されている。分量はおおよそ、テキストの1ページ分の量で示すものが多かったが、中には2ページ分の量で示すものもいくつか見られた。上の（表4）はテキストにおいて使用されていた練習問題の形式の数

に関する調査結果を示したものである。3つの形式を用いていたテキストが最も多かったが、平均すると4つ前後の問題形式が一つのテキストにおいて使用されていることがわかる。

3.3 練習問題の形式について

(表5) 4) 5)

問題形式	事例数	問題形式	事例数
日本語の文を中国語に訳す	11	文の一部を記入し、文を完成させる	3
語句を並べ替え文を作る	11	ペア会話	3
中国語の文を日本語に訳す	10	置き換え練習	3
書き取り (リスニング)	10	誤文訂正	2
空欄補充	9	あるテーマに関する文章作成	2
課文の内容に関する質問に答える	7	課文と関係がない質問に回答	2
ピンインに関する問題	7	関連語を線で結ぶ	2
課文の内容に関する質問に答える (リスニング)	7	その他 ⁶⁾	7

上に示す(表5)は、本稿で調査の対象とした25部のテキストにおいて用いられていた練習問題の形式について調査した結果である。最も多かったのが、「日本語の文を中国語に訳す」と「語句を並べ替え文を作る」という問題で11例、次に「中国語の文を日本語に訳す」や「空欄補充」といった練習問題の形式がよく使用されている。またリスニングの問題に関しては、計17例見られた。リスニング問題の中で多かったのが、「聞いた中国語を書き取る」で、10例あった。練習問題の内容に関しては、ほとんどが同じ課の「課文」や「ポイント」で学習した事項の復習のために設けてあると見なせるものであった。また、「課文」や「ポイント」の箇所では提示されている文やフレーズをそのままの形、或いは一部を換えて練習問題を作成するテキストが7部あった。一方で「課文」や「ポイント」の箇所では提示されている文やフレーズとは全く異なるものを使用した問題を示すテキストは17部であり、比較的多かった。また「課文」や「ポイント」の内容とは直接的な関連性が薄いと見なせるような練習問題の提示も一部見られたが、その課で学習したことと全く関係がない問題が提示される例はほとんど見られなかった。

3.4 語彙学習に関する練習問題について

今回の調査で、テキスト使用者の語彙学習を中心に作成されていると見なせる練習問題はいくつか見られた。『やさしい中国語中級会話・読み物』(豊嶋 2006)では「次の語句のピンインを書きなさい。」という練習問題が示される。『中国を語る』(山下 2010)では、「線で次の語句を結びなさい」という問題が示されるが、これは語のコロケーションの理解度を試す問題であると見なせる。『焦点中国』(植屋 2011)では、語彙表が示され、その中のピンインや日本語訳を参考にして相当する中国語の単語を記入する問題が示される。さらに同じ課で示した語の関連用語として、1課につき10の語を挙げ、それに相当する語義を線で結ばせるという問題がある。

しかし、全体的に学習者の語彙学習の為に作成されていると見なせる練習問題は少ない。空欄補充の問題や中国語に訳す問題では、ある単語や語句の理解度を試すような問題が見られるが、これらのほとんどが文レベルにおいて、ある語の用法や文法義を考えさせ、答えさせるものである。フレーズや文、或いは文章レベルではなく、語彙レベルにおいて何らかの形で学習した語の理解度を試すような問題は非常に少ない。また問われている内容を見ると文法項目や虚詞などが大半を占め、語彙論における事項や内容がテキストにおける練習問題の作成の際に考慮されることも、極めて稀であることが指摘できる。

4. テキストにおける練習問題に関する問題点

前章で示した調査結果に基づき、テキストにおける練習問題に関する問題点をいくつか述べる。

4.1 テキストにおける練習問題の配置について

主に大学の授業で使用される中級レベルのテキストは、「課文→語注→学習ポイント→練習問題」という一課分の構成、配列を用いるものが大多数を占める⁷⁾。前章の(表2)で示す通り、大多数のテキストにおいて練習問題は各課の最後に設けられている。これは、練習問題はそこの課で学習した事項を総合的に復習するためのものであるというテキスト著者の意図によるものであると言える。ただ、各課で学習した内容に対する総合的な復習という意義以外の側面から考えれば、練習問題の配置に関しては様々な可能性がある。具体的に言えば、各課の最後というような画一的な配置の他に、各課の最初、単語語注の後、ポイント項目の直後の部分などの位置に練習問題を示す方法が考えられる。

まず、各課の最初に練習問題を示す場合は、前の課で学習した内容に関する練習問題を設けることができる。その際、その課で学習する内容と関連性が深い事項を挙げるのが効果的である。例えば、アスペクト助詞の“着”が課文に多く出てきたり、ポイントで挙げていたりするような課において、すでに“了”、“过”を学習している場合は、その課の最初で、同じアスペクト助詞の“了”や“过”の理解度を試すような練習問題を示す。これにより、学習者に前の課で学習したことを確認させ、その後、同じ課で学習する新しい事項に対する体系的な理解を促すことができる。次に、語注の直後に設ける練習問題については、学習者の語彙学習に対して有用性のある問題を示すことができる。この点に関しては次章で詳しく述べるが、2章で示したように現在使用されているテキストにおいて、語彙レベルに関する練習問題は非常に少ない。その他、ポイント項目の直後に練習問題を設ける方法がある。中級テキストにおいては、一般的に5つ前後の主に文法範疇におけるポイントが示されるが、ポイントの箇所に、練習問題が設けられることは少ない。前述したように、テキストにおける練習問題は、一般的に各課の最後にまとめて提示され、その課で学習したことを復習できるよう、いくつかある学習ポイントに応じて作成されている。しかし、筆者の教育経験からすると、その問題がその課で学習したどのポイントに関わるものなのか判別できない学習者が比較的多く、教師側はこの点を注視する必要がある。とりわけ、「日文中訳」や「並べ替え」の問題については、この点が顕著であると言える。『チャイニーズアドベンチャー—DVDで学ぶ中国文化』(洪 2011)では、一課につき四つのポイントが示されるが、ポイント毎に、ポイントの項目となる語句を含んだ用例文が提示され、その下にその語句を使用し、文を作成する(日文中訳)練習問題が設けられている。このように学習した内容をすぐに確認したり、もしくは応用したりすることにより、学習者の理解度がより高まるといった効果が見込める。

4.2 練習問題の分量と難易度について

大学における外国語教育に対して、学生が「できる」ようになることを目的とした教育が最優先課題であると最近よく言われる。従来の知識の獲得だけのための外国語教育は、往々にしてその問題が指摘され、学習したことの基礎の上、練習し使用することの必要性が唱えられる。このように、コミュニケーション中心で実用重視の中国語教育を目的とするなら、テキストにおける練習問題の充実と強化が一つの課題となる。現在主に大学の授業で使用されている中級テキストにおける練習問題はおよそ1ページ分で、一課分の練習問題につき3、4の問題形式が用いられている。テキストにおける練習問題の分量について、筆者の教育経験から述べると、個人差はあるものの一般的な学習者であれば、一課分の練習問題をおおよそ10~15分で回答し終わると見なすことができる。練習問題は宿題として次回の授業までにやってくるように指導し、授業外の時間に行わせるという方法もあるが、学生の回答と解答の確認、解説なども含めて、授業中にすべてを行うとすれば、90分の授業時間の3分の1に相当する30分前後の時間がかかると見なせる。無論、授業はテキストだけで成り立つものではなく、授業内容や担当者がネイティブ教員か日本人教員かといった様々な授業に関する要素を考慮に入れなければならない。

その上で、一般的なテキストの練習問題の分量がおおよそ授業時間の3分の1の分量であることの妥当性を検討することは教師側の一つの課題である⁸⁾。中国の対外漢語教育界では“老师少讲、学生多练”というフレーズが一つの教育指針としてよく使用されるが、これは日本の大学における教育現場に対しても言えることであろう。前述したように、学習者が「できる」ようになるための教育方法を考えるのであれば、テキスト一課分の構成について練習問題の分量をより増加させる必要性を指摘したい。

また今回の調査により、一定程度は難易度の側面から練習問題が作成され、また配列されていることがわかった。各課の練習問題については、前述したように平均して3、4の問題形式が用いられる。最初に、「置き換え」等の練習問題を示し、その後、「空欄補充」や「並べ替え」を示し、最後に「日文中訳」や、「文の一部を中国語で完成させる」といった作文の問題を置くテキストが多い。このような配列は問題形式自体の難易度が注視された結果であると言える。

一つの問題形式について、例えば、「並べ替え」の問題が三つ示された場合、それらはテキストのポイント項目の順にしたがって作成される。つまり、一つのポイントにつき、一つの「並べ替え」の問題が示されるのが一般的である。ただ、難易度の側面により問題を作成し配列するという視点から考えれば、以下に示すように、一つのポイントに基づいて、同じ形式の三つの問題を設けることができる。

練習問題：次の語句を並べ替えて文を完成させなさい。

- ① [着／門／开]
- ② [穿／一件／着／她／新衣服]
- ③ [女士／坐／台上／着／两位]

上に示した例は、すべてアスペクト助詞の“着”というポイントに基づいた問題である。言うまでもないが、①の難易度が最も低く、③が最も高い。一つのポイントに対して、完全な理解を促すには、このような方法で練習問題を作成し、テキストに導入することができる。

また、3.3で述べたように、「空欄補充」や、「並べ替え」、「日文中訳」など形式を問わず、練習問題に使用されるフレーズや文が、同じ課の前に示される課文やポイントの箇所で示されるものと全く同じであるテキストが一部見られる。また同じ課の前に示した課文やポイントで示した文やフレーズを一部換えているテキストや、全く異なる形式のフレーズや文が示されているものも見られる。当然のことながら、難易度から見れば、課文やポイントのものをそのまま練習問題に使用方法は易しく、反対に、一部換えたものや、全く異なる形式のフレーズや文を用いると難易度が高くなる。前のページを見れば、機械的に回答できる前者のような方法も反復練習として、学習者に印象付けて覚えさせるという意味では効果的である。しかし、学習者の理解度を高め、応用力もつけた上でレベルを向上させるという目的にしたがえば、やはり後者の方法に有用性があると考えられる⁹⁾。

4.3 授業中に行う問題と自主学習で行う問題の分化

テキスト各課の最後に提示された練習問題に関して、これらをいつ、どのように行うのかといった詳細な記述がテキスト内に明示されることはほとんどない。したがって、テキストの練習問題をどのように使用するのは、おおむね授業を担当する教員の判断に基づき決められるということが言える。授業中に、時間を与えて学生自身に解かせたり、一問ずつ学生を指名して口頭で答えさせたりする方法。また、次回の授業までに学生にやってくるよう指示し、次の授業で解答を確認し、教員が解説をするやり方や、また解答を教員が教えて、学習者にすべて自分で確認させて理解させるような方法もあり得る。

しかし一方で、前章でも述べた通り、中級テキストにおける練習問題に関する構成や配置は、各課の最後に置かれ、ある一定の問題形式が使用されるというように、全体的に均一性が見て取れる。そこで、既存のあらゆる練習問題の形式や構成、内容に加えて、さらに様々なタイプの練習問題を作成し、テキスト内に導入する。つまり、練習問題をより多様化することがテキスト作成にあたっての一つの課題として挙げられる。現在、主に大学

の授業で使用される中級テキストの練習問題を観察すると、授業中に行うためのものと学習者の自主学習用のものが分けられることはほとんどないが、これらを分化することが一つの具体的な方法として考えられる¹⁰⁾。筆者の本務校の学生¹¹⁾の日ごろの学習状況を観察すると、ほとんどの学生が「テキストで学習する」、つまりテキストを通して自己の実用的な語学力を身に付けるという意識は希薄であり、教師側の認識とは多少の乖離があるように思う。無論学生による個人差はあるものの、「テキストを学習する」、つまりテキストの範囲内での学習が、中国語学習そのものであり、すべてであると考えている学生が意外に多い。これらの学生は学習に対して、決して怠惰で消極的であるというわけではない。授業外活動等にはあまり興味を示さないが、授業で指定されたテキストの範囲内では、授業外の時間においても熱心、かつ継続的に自主学習し、それなりの学習意欲が見られる。このような学生の状況に照らし合わせれば、テキストは授業で使用するだけでなく、学習者の自主学習に対しても大きな作用をもたらすということを確認した上で、テキストの構成や内容の提示を考えることが、教師側にとっての一つの課題となる。

4. 4 練習問題の性質に応じたテキスト内への導入について

練習問題の形式や内容など、そのタイプに応じたテキスト内への導入が一つの課題として挙げられる。テキストで使用される練習問題は、“機械型”「機械型」、「理解型」「理解型」、「任务型」「タスク型」という、おおよそ三つのタイプに分けることができる¹²⁾。今回調査したテキストの中では「次の語句のピンインを書きなさい」¹³⁾という問題や、文の一部の語句に下線を引き、その部分を下に示した語句に置き換えて練習する問題¹⁴⁾、「次の文章を朗読しなさい」といった機械型の問題が一部見られる。また「実際の状況に従って、次の質問について、ペアで会話練習をしましょう。」¹⁵⁾、「設定された場面役割に合わせて、ロールプレイをしてみましょう」¹⁶⁾といった「タスク型」の練習問題も一部のテキストにおいて見られた。しかし、筆者の調査によれば、3.3 で示したように日本で使用されている中国語中級テキストでは、圧倒的に「並べ替え」や「空欄補充」、「日本語訳」や「作文」などの「理解型」のタイプの問題が多い。

「機械型」問題は、その性質から各課の最後で「理解型」問題と併記するよりも、前の課で習った点の復習として、各課の最初で提示する方法が考えられる。また語注の直後において、「そのまま単語を書かせる」、「ピンインから漢字に直す」、「単語表を埋める」といった形で提示するという方法もある。また「タスク型」問題については、初級テキストへの導入は、学習者にとっては難易度が高く、適合度はやや低くなると言える。初級テキストでは、やはり「機械型」や「理解型」の練習問題を中心にすることが適当であり、「タスク型」の導入には慎重になる必要がある。ただし、コミュニケーション能力の向上を一番の学習目的とする場合、中級レベルにおいては、「タスク型」の練習問題を一定程度は導入するのが効果的であると言える。練習問題における「タスク型」の配分の比率を高めると同時に、具体的にどのような「タスク型」の問題を導入するのが適当であるのかといった問題も検討する必要がある。

外国語教育において、タスク活動の重要性がよく唱えられる。しかし一方で、テキストにおいては全般的に「タスク型」の練習問題が「理解型」の練習問題に取って代わるといった状況はあまり見られない。「タスク型」の問題は「理解型」の問題のように明確な解答があるわけでない。それゆえ、授業で使用するテキストには相応しくなく、また成績評価に関わる定期試験の問題としても出題に適さないと見なされることが一つの理由として挙げられる。テキストの著者、或いは教師側の見方として、「タスク型」の練習は、担当教員が状況に応じて、テキストの内容に基づいた自作の問題を学習者に行わせるのが理想的であり、テキスト内に一定の形式で導入するのは相応しくないということがあるのかもしれない。ただ、外国語学習のみならず、教育現場の学習者の状況に照らし合わせて考えれば、「タスク型」の練習問題をテキストに導入することはある程度の必要性が認められる。前節でも述べたように、最近の学生はテキストにある事項は必死に学習し、その重要性を認識する反面、テキストに書かれていないことやコラム的な扱いがされている事項に対してはその重要性を認識せず、正規の学習事項として見なさない傾向にある。したがって、何らかの形で「タスク型」の練習問題を導入することで、学生はその重要性を認識することが見込める。

5. 語彙学習に関する練習問題の必要性

3章で中国語中級テキストの練習問題についての形式や内容に対する調査結果を示したが、さらに内容の面を考察すると、いかなる形式の問題でも問われているのは同じ課のポイントの部分で示した事項が大多数を占めることがわかる。中級テキストのポイントの項目に挙げられる内容として多いのは、例えば「ポイント①因为②怎么③了④终于⑤被」というように、個別の単語が語の単位で挙げられる例である。ほとんどが虚詞であり、また助動詞、疑問詞、量詞などの実詞も一部見られる。また“一～就…”、“一边儿～一边儿…”、“就要～了”、“对～来说”、“怎么也～”、“越来越～”、“一点儿也不～”等の連語やセットフレーズがポイントの箇所に挙げられる例も多い。さらに「受身構文」、「比較構文」、「“是～的”構文」、「二重目的語構文」など、文単位で挙げる例や「結果補語」、「方向補語」、「文の形をした目的語」など文成分が使用される例も多く見られる。全体的に見れば、文法的な範疇における要素、事項と見なせる例が多数を占めるが、それに伴って練習問題についても、一般的にこれらの文法的な事項を問う問題が示される。

3.4でも触れたが練習問題全体に対する比率から言えば、語彙学習に関するものはごくわずかである。教育上、学習者の語彙学習や語彙習得を重視し、また「受信語彙」としてだけではなく、「話す」「書く」という「発信語彙」の段階までの習得を目的として考えるのであれば、現在使用されている練習問題に加えて、語彙論的事項を基準にした練習問題の導入を視野に入れる必要がある。さらに、知識の獲得だけではなく、言語使用能力、つまりコミュニケーション能力を見据えたテキストの構成や編成を考えるのであれば、一つの語に対して、音声情報である「ピンイン」と意味情報である「訳語（日本語）」だけを示す従来の方法では、不足であることは明らかである。「ピンイン」や「訳語」と同時に、「語彙の深さ」¹⁷⁾を学習者に学習させる必要があり、それに応じた練習問題を作成し、テキストに導入することが教育上の一つの課題と言える。

「語彙学習」というのは、「単語を暗記することである」と認識している学習者が多い。小テストや定期テストにおいて、「単語のピンインや語義に関する問題を出題する。」と授業で学生に伝えた際、嬉しそうな表情をする学生はほとんどいない。「単語の問題はやめて、課文の和訳の問題を多めにしてください。」といったテストに対する学生からの要望もよく聞かれる。このような学生の反応の背景には、語彙学習とは単語を一つ一つ暗記することで、そのためにはひたすら何度も同じものを繰り返し書き写したり、読んだりといった単純作業を根気強く反復するほかはない、といった学生の認識があるように思う。定期テスト等の学生の回答を詳細に観察すると、文の訳はできても、その文中に使用されている個別の単語の語義は答えられないといった不可解な現象もよく見られる。また普段の教員現場から受ける印象として、数多くの単語を覚えられないことが原因で、外国語学習全体に嫌気がさしてしまうといった学生が増えている感がある。このような、学生の単語学習への抵抗感や嫌悪感を少しでも減少させ、より多くの語を効果的に学習し、習得させるための方法として、次章において述べるような、語彙論的事項を基準に作成した問題をテキストに導入することが挙げられる。

6. 語彙学習を中心とした問題

ここでは、学習者の語彙学習のための語彙論的事項を基準とした練習問題に関する例を示す。実際テキストにおける練習問題として導入する場合は、テキストの課文との結びつき等の整合性を考慮する必要がある。そこで、最後の6.6において、ある文章を課文と仮定し、それに基づいた語彙に関わる練習問題の試案を示す¹⁸⁾。

6.1 類義語に関する練習問題

類義語に関して、以下のような三つのタイプの練習問題が考えられる。

①次の語の類義語を「ABC」の中から選びなさい（或いは「意味が近いものを選びなさい」）。

“愿意”－A 打算 B 想要 C 应该

“提交”－A 交代 B 提出 C 提要

②文中の()に入る語として適当な語句を選びなさい。

・我今天()不舒服。¹⁹⁾ [A 一点儿 B 有点儿 C 一下]

・火车就要出发了,请大家()一下自己的行李。[A 调查 B 检查 C 测验]

③次の二つの語句の違いに注意して、右の文の()に入る適当な語を選択しなさい。

“提交”“提出” ・你已经()毕业论文了吗?

“怎样”“什么样” ・你想买()的包?

上の①は三つの中で、最も難易度が低く、テキスト内に示す練習問題としては適していると言える。ただ選択肢に挙げる語は学習済みであることが問題作成の条件となる。②は検定試験などで用いられるタイプの問題であるが、テキストの練習問題として使用する場合は、選択肢に挙げる語がすべてその課や前の課で学習済みであることが条件となるので、問題作成時には、ある程度の注意を要する。③は直接類義語の弁別を学習者に考えさせるので難易度は高いが、特に日本人学習者が誤りやすい類義語に関しては、このようなタイプの練習問題が効果的であると考えられる。

6. 2 反義語に関する練習問題

反義語に関して、以下のようなタイプの練習問題が考えられる。

①次の語の反義語を「A B C」の中から選びなさい(或いは「意味が反対の語を選びなさい」)。

“热闹”－A 寒冷 B 冷清 C 谨慎

“高雅”－A 低调 B 通俗 C 骄傲

②次の文中における下線が引かれた語句と意味が近いものを選びなさい。

・为什么他们越来越不快乐了呢? A 高兴 B 烦恼 C 紧张

・我爱人房间布置得不讲究。 A 朴素 B 随便 C 喜欢

とくに形容詞の学習については、その反義語とセットで覚えるのが望ましいと言われるが、その前提として学習者に反義語の存在と意義を意識させることが必要である。上の①のタイプは直接、相当する反義語を問う問題である。テキスト内で用いる場合、選択肢に挙げる語はなるべく学習済みであることが問題作成の条件となる。②は否定形との意味関係と文意を利用して、学習者に考えさせるタイプの反義語に関する練習問題である。下線部の語がその課で学習する単語であり、また選択肢に挙げる語も学習済みである方が望ましい。

6. 3 コロケーションに関する練習問題

コロケーションに関して、以下のようなタイプの練習問題が考えられる。

①次の()に入る語句を選択肢の中から書き入れなさい。

・提交()

高中()

取得()

考上()

学分
论文
研究院
毕业

②次の（ ）に入る語句を選択肢の中から書き入れなさい。

- | | |
|------------|----------------------------|
| ・（ ） 毕业论文 | 提前
提交
提高
提问
提出 |
| ・（ ） 了很多要求 | |
| ・（ ） 完成任务 | |
| ・回答参加者的（ ） | |
| ・（ ） 英语水平 | |

③次の中国語の文において使われている語の中から、下に示した日本語に相当する中国語を書き入れなさい。

您的热情招待使我们十分感动。

「心のコもったおもてなし」() () 2語

我的介绍到此结束,谢谢大家。

「これで終わります」() () () 3語

去国外出差,一定要先安排好日程,并事先跟目的地的客户取得联系。

「スケジュールをきちんと調整する」() () () 3語

「連絡を取る」() () 2語

上の①は、課文やポイントに出てきた単語について、前後においてよく結びつく語を選択させる問題である。①で示したようなコロケーションが同じ課の語注などの部分で示されている場合、問題の難易度が低くなり「機械型」の練習問題と見なせるが、これらが練習問題の箇所では初出の場合は難易度が若干高くなる。②は①と同じ形式の問題である。ただ、選択肢に挙げる語は例のように、すべて同じ形態素を含む語や類義語である。したがって、難易度は①の問題より格段に高くなる。中級レベルの学習者に対して、コロケーションを利用することにより、語義の複雑さや日本人学習者が誤りやすい“提出”などの所謂、日中同形近義語²⁰⁾を効果的に学習させるのがねらいである。③は文意を参考にしながら、常用されるコロケーションを文中から選び出す問題である。これにより、学習者の語彙学習におけるコロケーションの重要性に対する意識を高めることができると考えられる。上に示したような形式の練習問題について、前の課文やポイントの部分で既出のコロケーションが問われる場合は比較的平易であると言える。上のように選び出し書き入れる形式ではなく、“您的() ()使我们十分感动。「心のコもったおもてなし」”のように解答となる中国語の個所を示さず、直接書き入れさせる形式も考えられる。ただ、この場合、練習問題の難易度は高くなり、テキストにおける練習問題として使用する場合は、解答となるコロケーションが既出であることが求められる。

6. 4 語構成に関する問題

語構成に関して、以下のようなタイプの練習問題が考えられる。

①次の語と同じ語構成である語を右の選択肢の中から選びなさい。

- | | |
|---------|----------------|
| ・跳舞 () | 运动 唱歌 足球 爸爸 年轻 |
| ・橘子 () | 树木 演员 桃儿 长高 日落 |

②次の()に適当な接尾辞を書き入れ、語を完成させなさい。

- ・裤() 石() 画() 味() 木() 茄()

既存の大学授業用の中級テキストで、語構成について言及しているものはほとんど見られない。中級レベルの学習者に対する語彙指導の中に、語構成や接辞の概念を取り入れることが重要であると思われる²¹⁾。テキストにおける「単語」や「語注」の部分におけるすべての単語にこれらの語構成の型を示す必要はない。ただ、上の問

題例の“跳舞”と解答の“唱歌”に対する「述目型」の語構成であるという知識は、“跳了一个小时舞”や“唱了一首歌”というように間にある成分を挿入できるといった句（連語）や文レベルの文法範疇における様々な要点に対する理解にも繋がる。このような中国語の特徴を考慮に入れれば、学習者にこれらの語構成のタイプを認識させることに一定の有用性があると言える。

また、中国語の「付加型」とされる語はやや特殊な語構成をもつものである。特に日本語の語彙にはない接頭辞の“老”、“阿”、接尾辞の“儿”、“头”、“子”などは接辞の概念とともに学習させるのが望ましい。上の②は適当な接尾辞を書き入れ、語を完成させる練習問題の例であるが、このような練習問題により学習者の接辞に対する意識を高めることができると言える。問題形式としては、選択肢（“儿”、“头”、“子”）を設けることも可能であるが、この場合は問題の難易度は低くなる。

6. 5 多義語や多音語に関する問題

多義語や多音語に関して、以下のようなタイプの練習問題が考えられる。

①次の語は多くの意味を持つ多義語である。この語が示す語義に注意し、右に示すフレーズの意味を述べなさい。

- ・打 打了两个小时球 ()
- 只打雷不下雨 ()
- 给他打了电话 ()
- 千万不要打人的头部 ()

②次の語は右に示すように、多くの意味を持つ多義語である。その下に示した文中で、その語がどの意味で用いられているのか答えなさい。

开:開ける、運転する、開催する、点ける、離れる、沸騰する

- ・司机师傅请您开得慢一点儿。 ()
- ・你可别开着电视机睡觉。 ()
- ・请稍等, 刘总经理正在开着会呢! ()

③次の文中の下線が引かれた語の発音として適当なものを選びなさい。

- ・我 ①还是 想 把 这笔钱 ②还给 他。 ① () ② () hái hài huán huàn
- ・菜 挺 多 的, 我 吃 不了了。 ① () ② () le liǎo liào lèi

最近は電子辞書の普及により、学習者は意味が分からない語句に接したとき、すぐに調べられるようになり便利な学習環境が整った。しかし、便利になった反面、中国語の語と日本語の相当する訳語を一对一の単純な関係で認識してしまう学習者が増加する傾向が生じたと言える。中国語には数多くの多義語があるが、例えば“走”について、最初に“走(歩く)”と学習すると、その後学習者はすべての“走”に対して、機械的に「歩く」というように解釈してしまうことがよくある。このような学習者の語彙学習に対する姿勢を改め、語の多義性を認識させるためには、上で示した①と②のような練習問題の必要性が認められる。語のレベルでも、問題の作成は可能であるが、①と②の例のように、フレーズや文のレベルで使用されている多義語の語義を問うような問題が効果的であると考えられる。③は多音語の問題であるが、中級レベルの学習者に対しては、このような多音語の存在も学習内容として見なすことができる。現存のテキストにおいては、語注の箇所でも、このような多音語の例を示し、注意事項として挙げているものが一部見られる。ただ、③のような練習問題を付してあるものはほとんど見られない。

6. 6 課文に応じた語彙学習に関する練習問題について

テキストに示す練習問題は、テキストの同じ課の課文やポイントの内容に応ずる必要がある。ここでは、ある

一定量の文章を課文と仮定し、それに基づいた語彙学習に関する練習問題を試作した。

課文：王〇〇先生：

您好！我从中国回来后，A转眼已经半个月了。由于工作很忙，没有马上给您发伊妹儿联系，非常抱歉。请您看一下，附件里的照片是我们在中国一起E照的。这次旅行，对我来说，所见所闻一切都非常新奇，我对中国更感兴趣了。

在青岛我很幸运地认识了您。我们一起去喝青岛啤酒，B亲切交谈。您的热情招待使我非常感动。现在我们这儿一下子F就C冷起来了。今天下了一场大雪。这样的天气将持续到明年三月。不知道您那儿天气如何？

我希望我们今后常常联系，并且希望您能给我纠正我的汉语。等待着您的回信。敬祝身体健康！工作D顺利！

您的日本朋友〇〇△△

2013年12月10日

練習問題1：下線部A、Bの語と最も意味が近い語を右の選択肢の中から選びなさい。

A ()

非常	一下子	持续	常常
----	-----	----	----

B ()

幸运	热情	感动	等待
----	----	----	----

練習問題2：下線部C、Dの語と反対の意味を示す語を右の選択肢の中から選びなさい。

C ()

多	热	好	烫
---	---	---	---

D ()

轻松	困难	贫穷	冷淡
----	----	----	----

練習問題3：文中のフレーズから、次の意味に相当するフレーズを書き出さない。

①今回の旅行 () ()

②心のこもったおもてなし () ()

③私の中国語を直す () () () () ()

練習問題4：課文を参考にして、次の語と結びつく最も適当な語句を右の選択肢から選び書き入れなさい。

发 ()
认识 ()
下 ()
等待 ()

您的回信
一场大雪
您
伊妹儿

な語句を右の選択肢から選

練習問題5：下線部E、Fの語義と同じ語義を示すものを選択肢から選びなさい。

E () あ照计划实行 い照一张相片 う照镜子 え阳光照在阳台上

F () あ这儿就是我们学校 い就我一个人参加 う他马上就回来 え下雪就不去

このような学習者の語彙力の向上を目的とする語彙範疇における問題は中国語の資格検定試験などではよく見られる。しかし、中国語のテキストにおける練習問題として使われる例は、前述したとおりほとんど見られない。上に示した例は、すべて語彙学習のために作成した問題（1は類義語、2は反意語、3と4はコロケーション、5は多義語に関する問題の例）であるが、このように課文と結びつける形で、テキスト内においても導入することが可能であると言える。

7. おわりに

以上、本稿では主に大学授業用の中国語中級テキストの練習問題について調査及び考察を行った。本論で述べた通り、現在使用されている中級テキストにおける練習問題の形式や内容はやや画一的な面があるという結論を得た。したがって、テキスト内の練習問題については、現状のものに加えて、もう少し他のタイプの問題を設けるなど、多様化されてもよいと考えている。本稿では、新しいタイプの練習問題として、学習者の語彙学習の面に着目し、語彙に関わる練習問題について考案し、試作例を示した。今後は、本稿で提示した語彙に関する練習問題について、実際に教育現場である授業で取り入れ、このような練習問題を行うことにより、学習者にどのような効果があり、学習者の学習状況にどのような変化が見られるのか検証することを課題としたい。その上で、テキストを作成する機会があれば、部分的に本稿で述べた論点や練習問題の試作例を取り入れたい。そして最終的には、語彙を中心とした中国語中級テキストを完成することが本研究の目的である。

注

- 1) 「課文」、「語注」、「ポイント(要点)」、「練習問題」という四つのテキストの構成要素の他、「コラム」や「巻末語彙索引」、「音声資料」などが副次的な構成要素であると見なせる。
- 2) 浅野雅樹 2012 を参照。
- 3) 本表において示す数には、巻末等の付属の問題は含まれていない。
- 4) 本表において示す数には、巻末等の付属の問題は含まれていない。
- 5) 「空欄を埋めた上で日本語に訳しなさい。」というように二つの形式にまたがる練習問題については、それぞれを二つに分けてカウントした。
- 6) 「その他」の内訳は、「単語の意味を答える」、「ロールプレイ」、「ある場面でのフレーズを覚える」、「語彙表を埋める」、「文の書き換え」、「文章の朗読」、「長文読解」がそれぞれ一例であった。
- 7) 今回調査した 25 部のうち、おおよそこの「課文→語注→学習ポイント→練習問題」という構成が用いられていたのは、20 部であった。
- 8) 周健・唐玲 2004 (p68) では“我们认为综合课课后练习用时与课堂教学用时的比率保持在 1:1 左右的水平是比较适宜的。听力和口语的提高更多的是靠社交语言实践,练习的设计也应体现鼓励学生自觉进行语言实践的特点。”という指摘があり、参照した。
- 9) 周健・唐玲 2004 (p71) では“从认知心理的教育理论出发,最佳训练程式是由浅入深,由近及远,从易到难,先掌握的知识 and 技能应成为后面学习训练内容的认知基础,这样才能滚雪球式地扩大知识,增长技能。”という指摘があり、参照した。
- 10) 李泉主编 2006 (p197-p198) を参照。
- 11) すべて経済学部所属の学生である。したがって、筆者の本務校で中国語を履修する学生は専門外の第二外国語の学習者であると見なせる。
- 12) 李明 2011 (p 176) では“我们对使用较为广泛的部分综合汉语教材中的词汇练习进行了初步考察,发现很多练习题类型类似或者完全相同,我们可将之称为“共有题”。将这些共有题型进行归类,大致可以归属于下述三种基本练习类型:机械记忆型练习、理解分析型练习和任务型词语练习。”と述べられている。本稿では、この分類を参照した。
- 13) 豊嶋裕子 2006 を参照。
- 14) 遠藤光暁 2011 を参照。
- 15) 洪潔清 2011 を参照。
- 16) 守屋宏則 2007 を参照。
- 17) 門田 2006:223-225 頁を参照した。
- 18) 以下、問題実例の作成にあたり、相澤一美・望月正道 2010 を参照した。本書では英語の語彙指導の実践アイデアとして多数の語彙に関する練習問題の例が示されている。
- 19) 以下、本稿で用いる中国語のフレーズ、文、文章はすべてインフォーマントのチェックを経た作例である。
- 20) 王順洪 2008 (p112) を参照した。
- 21) 中国語教育学会作成の『中国語初級段階学習指導ガイドライン』(2007) の 1 章には形態素や語構成など語彙論における事項が示されているが、これらが中級テキストにおいて何らかの形で明示される事例は非常に少ない。

主要参考文献

- 相澤一美、望月正道 2010. 『英語語彙指導の実践アイデア集』大修館書店
浅野雅樹 2012. 語彙を中心とした中国語中級テキストに関する研究序説, 『下関市立大学論集』第 55 卷 3 号: 67-78 頁
門田修平、池村大一郎 2006. 『英語語彙指導ハンドブック』大修館書店
李泉主编 2006. 《对外汉语教材研究》商务印书馆
李明 2011. 《对外汉语词汇教学与习得研究》中国大百科全书出版社
刘颂浩 2009. 对外汉语教学中练习的目的、方法和编写原则, 《世界汉语教学》1:111-120 頁
王顺洪 2008. 《日本人汉语学习研究》北京大学出版社
周健、唐玲 2004. 对外汉语教材练习设计的考察与思考, 《语言教学与研究》4:67-75 頁

調査の対象としたテキスト (計 25 部)

- 荒川清秀、周閔 2003. 中国見たり聞いたり 15 章, 光生館
池上貞子 2008. 中国ってこんな国 一素顔の“漢流”生活一, 朝日出版社
上野恵司 2007. 総合中級中国語, 白帝社
植屋高史、鄭偉、谷川栄子、阿古智子、砂岡和子 2011. 焦点中国, 白帝社
遠藤光暁、衛榕群、汪曉京 2011. リアルタッチ中国, 朝日出版社
王曙光 2003. 中文大世界, 白帝社
大西博子、魏穂君、大東和重 2008. 自分のことばで中国語, 光生館
郭春貴、郭久美子 2012. 実用中級中国語, 白帝社
胡金定、荊秉月、衛榕群、鄭萍 2009. アクティブ中国, 朝日出版社
洪潔清 2011. チャイニーズアドベンチャー, 金星堂
杉野元子、黄漢青 2008. 大学生のための現代中国 12 話 II, 白帝社
関根謙、陳祖倍 2000. 中国語のひとつとき, 朝日出版社
佐藤晴彦監修、徐送迎答 2013. We can 中国語中級, 朝日出版社
瀬戸口律子、汪玉林 2012. 中国語のかけはし, 駿河台出版社
瀬戸口律子、何旭、板垣友子、竹内誠 2013. 中国文化の輪, 駿河台出版社
張継濱、小川文昭 2005. 中国ってどんな国?, 白水社
豊嶋裕子 2006. やさしい中国語中級会話・読み物, 光生館
平井和子、于小薇 2001. 中国語の魅力, 好文出版
孟広学、本間史 2008. 変化する中国, 白水社
守屋宏則、陳淑梅、劉光赤 2007. メグの中国ホームステイ, 同学社
山下輝彦、蘇英霞 2008. 中国を語る一文化と生活一, 金星堂
八木章好、吉永壮介、鄭麗媚 2008. 中国語で巡る「漢詩」と「三国志」の旅, 朝日出版社
楊凱栄、張麗群 2002. 実力のつく中国語, 白帝社
李貞愛 2011. リアルスコープ現代中国事情, 朝日出版社
劉穎、小澤正人、柴森 2011. 2 冊目の中国語講読クラス, 白水社

付記

本稿は平成 24 年度科学研究費補助金 (若手研究 B 「語彙を中心とした中国語中級教材作成について」課題番号 23530242) における研究成果の一部である。